

平成 30 年 6 月 17 日現在

機関番号：84413

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12830

研究課題名(和文)「天覧」でみる美術工芸振興についての研究 - 天皇行幸は地方に何をもたらしたのか -

研究課題名(英文) A study on the possibility that the arts and craft of each region has been activated by Imperial inspection

研究代表者

中野 朋子 (NAKANO, Tomoko)

公益財団法人大阪市博物館協会 (大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、・大阪歴史博物館・学芸員)

研究者番号：00300971

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：美術工芸史的観点から「天覧」に注目し、天皇の行幸(巡幸)の際に何故、美術工芸作品が「天覧」されるのか、また「天覧」による「権威付け」がどのようなプロセスで地域の美術工芸振興にまで及んだのかについて明らかにすることを目的として、明治期以降昭和戦前期までの天皇による「天覧」、皇后以下皇室関係者による「台覧」について調査を行った。また「天覧」「台覧」に関わった地方の工房あるいは職人たちの活動実態の把握を目的として、地方の工芸家による万国博覧会をはじめとする各種博覧会における工芸作品の出品状況および出品内容の把握を進め、地方の工芸家および工房の活動範囲について把握し、その成果の一部を発表した。

研究成果の概要(英文)：From the Meiji era to the early Showa era, it is highly likely that the authority of these arts and crafts was done by "Imperial inspection" of the arts and crafts of various places when the Emperor visited the district. Therefore, we investigated the actual situation of the local workshops or craftsmen related to "Imperial inspection". We proceeded to grasp the state of exhibition and exhibition details of craft works to the exposition by local craftsmen. I grasped the scope of activities of rural craftsmen and workshops and announced some of the results.

研究分野：工芸史

キーワード：天覧 地方行幸 台覧 行啓 地方の美術工芸振興 工房の創立と継続性

1. 研究開始当初の背景

天皇や宮家による行幸および行啓をめぐる研究はおもに政治史分野を中心として研究が行われてきたが、視点を「天覧」あるいは「台覧」に移してみると、美術工芸史の研究、特に地方における美術工芸振興について探求する際に極めて重要な検討対象となることに注目し発案した。

2. 研究の目的

本研究は、天皇や宮家などによる行幸啓の際に行われた美術工芸作品の「天覧」「台覧」による「権威付け」が、どのようなプロセスで行幸啓先の地方の美術工芸振興に影響を及ぼしたのか、またそうした影響が現代の地方・地域の伝統工芸とどのように結びついてきたのか否かを明らかにし、最終的には地方を舞台に製作活動をおこなった工芸家の発掘と再評価に繋げていくことを目的とした。

3. 研究の方法

行幸啓に関する公式記録をはじめとする刊行物、新聞等の調査と精査によって、天皇および宮家関係者による行幸啓の内容を把握する。その際に「天覧」「台覧」についての記事から美術工芸品に関する情報を抽出して、出品者（製作者/工芸家）についての基礎情報を蓄積する。並行して出品作品ならびに同時期の同一作家の製作による美術工芸作品や写真資料を発掘する。また、当該工芸家の“家”と工房の活動状況を把握する。これらの調査結果をもとにして、天皇および宮家による行幸啓にともなう「天覧」「台覧」が“地方”の美術工芸振興に及ぼした影響と役割について探究し、“地方”で活動した工芸家の再評価をおこなうこととした。

以上の観点から、下記の調査を実施した。

- (1)各地の図書館等に分蔵される天皇の行幸および宮家による「台覧」に関する記録によって行幸啓先における美術工芸品の「天覧」「台覧」事例を収集し、実態検証を進めた。
- (2)上記の美術工芸品の「天覧」「台覧」事例から出品者（製作者/工芸家）についての基礎情報を収集した。
- (3)「天覧」「台覧」前後の出品者の評価を相対化させるために「天覧」「台覧」がおこなわれていない展覧会への出品歴とその評価に関する資料を収集した。
- (4)工芸家の“家”と工房の活動状況に注目し、太平洋戦争を劃期として工芸家の“家”と工房が存続したのか否かについて把握を進めた。

4. 研究成果

本研究では、明治維新後から昭和戦前期までの天皇ならびに宮家による行幸啓にともなう「天覧」「台覧」の開催に際して、美術工芸品どのように「天覧」「台覧」に供され、またそれによって地域の美術工芸振興にと

のような影響があったのかについて明らかにするために、全国への行幸啓記録に網羅的にあたり行幸啓の開催地、開催契機、「天覧」「台覧」の有無、出品者について事例調査をおこなった。

「天覧」「台覧」に際して美術工芸品が出品される割合が高い地域

その結果、「天覧」「台覧」の開催地は行幸啓の行われた全国に及ぶが、そのうち美術工芸品が展示される割合が高いのは、下記の3パターンに区分されることが判明した。

(あ)大阪・愛知などの都市圏

(い)京都、窯業地である瀬戸・美濃、岡山、富山など、現在でも基幹産業として工芸的産業が継続している地域

(う)天皇家の陵墓等が所在し、皇室の祭祀との密接な繋がりがある京都府・奈良県・三重県

特に、大阪を含む都市圏において開催された「天覧」「台覧」においては、地域の工業的生産品あるいは特産品として美術工芸品が出品される割合が高い。さらに特例的ではあるが明治10年(1877)の奈良・大阪巡幸の際には、廃仏毀釈を背景として奈良の法隆寺や正倉院からの美術品が皇室に献納される事例も「明治十年行幸記」(奈良県立図書館情報館蔵)によって確認している。

また、(あ)の大阪・愛知などの都市圏においては、行在所、駅や港湾の休憩室、学校において短時間に「天覧」「台覧」が行われる事例が多く見られた。

「天覧」「台覧」の開催契機

各地域における「天覧」「台覧」の開催契機は、

- (1)陸軍大演習などの軍事関連行事に伴う行幸啓に関連した開催
- (2)輸出振興政策に関わるもの行幸啓に関連した開催
- (3)各種博覧会や学校への行幸啓に伴う開催
- (4)その他、陵墓等への参詣等の地方巡幸に伴う開催

の4パターンに大別が可能となった。なお、東京近郊地域における行幸啓とそれに伴う「天覧」「台覧」は、陸軍大演習などの軍事関連行事に伴う場合、官幣社への参拝等、皇居を離れた郊外地域で実施されるため、仏像等の地域の歴史資料を除けば美術工芸品が「天覧」に供される機会は極端に少ない(『大正十年陸軍特別大演習東京府記録』、東京都立中央図書館蔵ほか)。他方で、(3)の各種博覧会への行幸啓や学校への視察に伴って実施される機会が多いことも判明した。

大阪への行幸啓と「天覧」「台覧」

大阪は江戸時代以来の「商都」として、鉄道の敷設や港湾の整備が早い段階で行われたことを背景に、さまざまな機会を捉えて行幸啓と「天覧」「台覧」が実施されているの

で、いくつかの特徴的な事例を挙げておく。
・明治天皇は、明治 10 年(1877)、明治 31 年(1898)、明治 36 年(1903)に皇后を伴う大阪へ行幸啓している。

・「北陸東海両道巡幸日誌」(東京大学附属図書館蔵)、「巡幸日誌」(東京大学史料編纂所蔵)、「明治天皇大阪行幸御事蹟謹話」(東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター蔵)の調査によって、明治天皇が各行幸先において博物場や天覧の会場に足を運ぶ様子が判明した。また天覧後の作品と会場がが一定期間一般公開される様子も記録されていた。

・「明治十年行幸記」(奈良県立図書情報館蔵、1877)には、同行幸中に勃発した西南の役の記録が多く含まれており、この戦役の影響によって、明治天皇による奈良から堺、大阪への行幸日程に変更等が生じ、いくつかの天覧が中止または延期になった様子などが記録されている。ほかに奈良県が保管してきた行政記録によっても明治天皇による美術品の「天覧」と皇室への献上品の実態を追うことができた。

・明治 36 年(1903)の第五回内国勸業博覧会へは明治天皇らによる行幸啓が盛んに行われ、美術品の献上と買上があった。

・第五回内国勸業博覧会、大典記念京都博覧会での天覧品および出品作品 5 件の調査を実施した。

・大正 2 年(1913)に天王寺公園で開催された「関西教育博覧会」では、大阪の名家からおもに歴史史料が展示され「台覧」が行われたことが「関西教育博覧会本館及附属実験館出品目録」(大阪府立中之島図書館蔵)、「大阪商工立志資料」(個人蔵)、大正 2 年 3 月頃から 10 月頃までの新聞記事の検索によって判明した。

・昭和 4 年(1929)の大典を記念した大阪への行幸において、大阪場内の行在所において「天覧」が行われ、美術工芸品が多数出品された。こののち兵庫県へも行幸した際の「天覧」については、「兵庫県行幸記録」(1930)、「神戸市行幸記念誌」(1929)、「行幸記念発明品展覧会出品目録」(1929)、「神戸税関行幸記念誌」(1929)、「行幸餘光録」(1929)等によって把握することが可能であるが、美術工芸品よりも実用品の出品が多く、大阪と神戸の出品傾向の違いを理解する上で興味深い。

・昭和 7 年(1932)の大阪における陸軍特別大演習に際して、大阪場内の行在所において「天覧」が行われ、美術工芸品が多数出品されている。また、この時、大阪府貿易館で名家所蔵品の「天覧」が開催された。大阪府貿易館で「天覧」に供された品々は、のちに一般に公開された。

・上記の大阪府貿易館で「天覧」の際に鴻池家から出品された家宝の名物裂筆笥および染織品(個人蔵、87 件)の実見調査を行った。

・昭和天皇による大阪および奈良への行幸に

ついては「天皇陛下大阪府奈良県大演習行幸記念写真帖」(奈良県立図書情報館蔵、1932)によっても把握することができる。

軍事演習に伴う全国への行幸啓と「天覧」「台覧」の事例

・「皇太子殿下山形行啓録」(京都府立図書館蔵、大正 14 年)には、摂政宮(のちの昭和天皇)が山形へ行啓した際の献上品と天覧陳列品が多数記載されている。山形出身の彫刻家で帝室技芸員の新海竹太郎(1868~1927)が原型製作を手がけ、山形市在住の横倉嘉吉が鑄造を手がけた青銅製の置物「農夫婦ノ像」が献上された記録と写真が見られる。新海は大正 6 年に帝室技芸員となっているが、行啓における帝室技芸員の果たした役割を探る上で興味深い記録である。

・「昭和二年十一月陸軍特別大演習奉迎写真帖」(愛知県図書館蔵)ほかによって名古屋への昭和天皇の行幸記録や同地の工芸図案集を検討すると、陶磁器、七宝焼のほか、漆器、煙管も同地の重要産品とされている。

・軍事的にも重要な拠点のひとつであった岡山には数度の行幸啓があるがその都度虫明焼など複数の美術工芸品が天覧に供されている(「吉備行幸光栄録」ほか)。

・福岡県は陸軍特別大演習が行われており、軍事拠点として重要視されていたが、福岡および九州各地への行幸関係資料(「天覧品目録並びに概説」九州大学附属図書館蔵、1935)ほかを調査した結果、美術工芸品の「天覧」はほとんど行われていないことが判明した。

・「満洲国皇帝陛下奉迎記念誌」(神戸市立中央図書館蔵、1935)を見ると、当時日本の統治下にあった満州国から皇帝を迎えた際には行啓と「台覧」が行われていたことが理解される。

各種博覧会や学校への行幸啓に伴う「天覧」「台覧」の事例

・東京府工芸品共進会における天覧品を記録した写真帖「小豆澤写真油絵」(明治 20 年)および「美術録写真」によって出品物の把握をおこなった。

・東京大正博覧会については、「東京大正博覧会出品之精華」および「日英博覧会新美術出品目録」「美術館出品図録」によって出品物の具体的な内容を把握した。

・昭和 15 年に開催が企図された「紀元二千六百年日本万国博覧会」に関する資料を東京都立中央図書館で調査した。

・工芸振興と輸出振興政策とも連関することになるが、一連の調査によって、明治維新後の京都で進められた地域産業活性化策としての府立の画学校設立、輸出工芸としての工芸図案の改良策についても調査する必要性が生じてきた。

地方産業との関わりが深い「天覧」「台覧」の事例と分析

・「明治庚戌行幸記事」(京都府立総合資料館蔵、明治43年(1911)、京都府内務部学務課作成)当時の東宮(のちの大正天皇)の京都市行啓記録で、美術品の台覧が多数掲載されている。

・「行啓記念」(京都府立総合資料館蔵、明治44年(1912)、富山市役所編)は、当時の東宮(のちの大正天皇)の富山行啓の記録で、多数の工芸品が行在所において台覧されている。

・窯業地である瀬戸市における明治維新後の殖産興業・輸出振興政策の流れを受けた陶磁器関連学校の設立と数々の展覧会へも出品、明治天皇、昭和天皇による巡幸に際しての「天覧」事例が確認できる。近代における窯業地での美術工芸品生産の流れを、学校教育から殖産興業への影響、展覧会への出品、学校教育へ還元と地方の殖産工業の活性化という視点から考察する必要がある。

・兵庫の出石焼、名古屋周辺の窯業地などでは明治20年代以降、産地独自に開発した技術の保全等を目的に積極的な特許取得が行われ、特許技術の独自性を最前面に押し出して製作品を販売を行っている。このような「技術の囲い込み」が大正から昭和戦前期になると「地方産品」という形で各地への巡幸記録に登場するようになってきている可能性がある。

・滋賀県湖東焼に関する調査から、幕藩体制のもとで庇護されていた地域産品が明治維新後に地域に根付き各地域の美術工芸品として発展していく様子が理解出来た。他産地でも同様の動きがあった可能性がある。

輸出振興政策に関わる施策と美術工芸品の製作指導

・権田保之助「美術工芸論」(大正10年)には当時の日本の対外貿易に占める美術工芸品の重要性が論じられているほか、渡辺素舟『現代日本の工芸美術』(昭和3年)には、戦前期の輸出工芸に関する記録がある。

・商工省所管陶磁器試験所編纂「貿易局工芸品輸出振興展覧会陶磁器試験所出陳品図集」(東京国立近代美術館蔵、1942)によれば、外貨の獲得のために工芸品を製作、輸出振興策として東京・大阪・名古屋・京都およびブラジル・チリ・ハノイなど海外において展覧会を実施しており、昭和戦前期から戦中にかけての美術工芸品の位置を考察した。

・大阪府工業奨励工芸産業奨励部図案係編「器物の形」(1939)大阪府工業奨励館編「国産リスト展覧会報告」(1932)をみると、輸出にかかる工芸品の製作に際しては輸出品としての工芸品の品質向上について、大阪府が主導していたことが理解された。

・「汎工芸」(1925)「商工省工芸展覧会図録」(1925)「農商務省工芸展覧会図録」(1919~25)「大阪産業工芸展覧会報告書」(1936~37)「大阪産業工芸博覧会報告書」(1936~37)「大阪府工芸協会雑誌」(1937)等の、

戦前に開催された展覧会および博覧会関係資料によって当時の大阪における工業的生産品の傾向も把握した。

・「大阪経済雑誌」(国立国会図書館蔵、1899~1918)によって、明治後期から大正期における大阪の工業生産と輸出の関わりを把握した。

その他、皇室行事との関わりから製作された美術工芸品、「献上」「買上」された美術工芸品の調査

明治、大正、昭和の三代の天皇に関する皇室行事、つまり天皇の即位礼、立太子、婚礼などに際して調製された調度類についても、東京以外に発注された工芸品が存在するため、地域の産業振興などという視点とはやや異なるものの、各地の工芸家にとって自身の製作品の評価に関わるなど重要な機会と考えられていた皇室の調度類調製についても調査する必要がある。

また、「献上品」あるいは「買上品」として皇室に納められた美術工芸品の所在等調査には時間を要するため、今後の継続課題としたい。

以上の、調査をもとに地方における美術工芸振興に「天覧」「台覧」がどのような関わりを持ったのかについて考察して論考にまとめ、近時に発表する予定としている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

中野朋子、「関西教育博覧会の開催と大阪の名家」、『大阪歴史博物館 研究紀要』第16号、2018、1~17頁、査読有

〔図書〕(計 2件)

中野朋子ほか、青幻社、『近代大阪職人図鑑 ものづくりのものがたり』、2016、152

小笠原小枝、佐藤留実、吉岡明美、中野朋子、国書刊行会、『名物裂の研究』、2018、260

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 朋子 (NAKANO, Tomoko)

公益財団法人大阪市博物館協会・大阪歴史博物館・学芸員

研究者番号：00300971